

近代の国づくり（1867～1900） その4

《ガス灯が石炭コンビナートを生む。多摩川ガス橋は、その象徴》

明治初期、鉄道、水道と並んで登場してくるインフラが、ガス灯です。1872年（明治5）、日本初の本格的なガス灯が、高島嘉右衛門（注1）とフランス人技術者により、横浜外人居留地内（現在の神奈川県庁から馬車道付近）の街路を照らします。（注2）

ガス灯は、ガス製造工場において石炭を高温で蒸してガス（一酸化炭素）を発生させ、それを道路下にガス管を配して、沿道に配置したガス灯を灯するという仕掛けです。明るさは、15ワットの電球程度でしたが、ランプより明るく、文明開化の象徴でした。

その2年後の1874年（明治7）、東京にガス灯が整備されます。東京会議所（注3）が設置し、2年後に東京府ガス局として公営化されたあと、1885年（明治18）に民営化され、東京ガス会社（現在の東京ガス株式会社）となりました。（注4）

ガス会社は、ガス炊飯器の開発など家庭用の熱源として需要を喚起するとともに（注5）、ガス生成時の廃棄物を販売し、規模を拡大していきます。廃棄物のコークスはセメント生成や製鉄の燃料となり、コールタールは化学製品に、アンモニアは化学肥料となって、その後の重化学工業を興します。石炭コンビナートが出現してくるのです。

需要を広げた東京ガスは、1930年（昭和5）、金杉橋の製造所を閉鎖して横浜市鶴見区安善町に製造所を建設し、東京へ輸送するために、翌年、多摩川にガス橋を架橋。まさに石炭コンビナートとして京浜工業地帯が形成された時期であり、ガス橋は、その象徴といえるでしょう。（注5）

なお、当初のガス橋は、人道橋も兼ねていましたが、1960年（昭和35）に現在のガス橋に架け替えられ、自動車の通行が可能となりました。

注1：高島嘉右衛門（生没年：1832－1914年）は、横浜の企業家。横浜に大旅館「高島屋」を建設。そこに伊藤博文と大隈重信が宿泊した折、鉄道敷設の必要性を説明したことがキッカケで、鉄道建設が実現します。横浜－神奈川間の線路は、埋め立てて敷設することになりますが、これを請け負い、造成した土地を政府に献上したことから、高島町と名前が付きました。

注2：ガス灯は、イギリスに遅れること70年、パリに遅れること60年で、日本に灯りました。

注3：東京会議所は、1872年（明治5）、江戸町会所の代わりに設置されました。ガス灯事業の工事は、高島嘉右衛門らが請け負いました。

注4：渋沢栄一（生没年：1840－1931年）は、生涯にわたり約500の企業の育成にかかわり、約600の社会公共事業にも尽力しました。東京ガスに関しても、1874年（明治7）、34歳にて東京会議所の会頭となってガス灯落成を行い、36歳のとき東京府瓦斯局事務長となり、45歳にして東京ガス会社取締役会長となっています。

注5：東京ガスが民営化された翌年、東京電燈が、発電・送電事業をはじめ、ガス灯と電球の競争の時代となり、昭和初期にはガス灯は姿を消しました。

注5：東京ガスは、1912年千代田ガス、1923年川崎ガスを吸収し、1945年に川崎ガス、横浜瓦斯局（横浜ガスは1892年横浜市瓦斯局として公営化）のほか、関東のほとんどのガス会社を吸収合併しました。

写真は、①横浜ガス灯のレプリカ（川崎市に設置されたもの、細見撮影）、②現在の多摩川ガス橋（橋桁に薄緑色に塗装されたガス管が添加されている。細見撮影）、③東京のガス関係の位置図（yahoo 地図に、細見加筆）

①



②



③

